特集 With コロナ時代の在宅褥瘡ケア

在宅褥瘡への関わりはコロナ禍でいかに変わったか

間宮直子
大阪府済生会吹田病院 皮膚・排泄ケア特定認定看護師／副看護部長

Point

- 普段からの顔の見える関係性がコロナ禍という緊急事態に大きな効果をもたらす
- 医療機関での感染対策を在宅でも同様に実践する意識をもつ
- コロナ禍の今だからこそ，自分にしかできないことを考える

はじめに

新型コロナウイルスの新変異株「オミクロン株」が大流行した「第6波」。過去最大の陽性者数のなか，エッセンシャルワーカーである私たち医療者すべては，不安を抱えながらもケアを提供すべく闘わなければなりませんでした。その場所が，医療機関であっても在宅であっても，感染拡大の当事者にならないよう細心の注意を払っていたことと思います。

病院勤務の隙間時間に訪問看護に同行し，在宅療養を学びながら褥瘡ケアへの指導をするようになって10年が経過しました。全世界に脅威を与えた新型コロナウイルスによって，急性期病院WOCNの在宅褥瘡への関わりはどのように変化したのでしょうか。

病院におけるコロナ対策の体制

在宅褥瘡のことを伝える前に，筆者の勤める病院（表1）がコロナ禍でとった体制を少し紹介します。

第1波の2020年4月，コロナ感染患者の入院受け入れを2床から開始しました。第2波の8月には，重点医療機関として12床を登録し，その後は大阪府からの要請に応じ確保病床を増床してきました。第4波のころには，重症患者の受け入れ要請に対応する体制が構築され，「中等症・一体型病院②」として地域医療の一端を担っています。また，周産期母子医療センターとして，妊産婦（出産対応）・小児の入院受け入れもしています。

外来においては，最初の緊急事態宣言発令より入口を1か所とし，職員による検温を開始しました。早期にサーモグラフィを設置し，試行錯誤しながら入口と出口のゾーニングなどの対応により感染対策を強化してきました（図1～図3）。

防護ガウン・キャップの在庫が確保できなかった当初，全職員でゴミ袋を切って制作した防護ガウンは，何百人という職員のコロナ禍におけるチーム医療の産物でした。ただ，汗は滝のように流れ，ゴーグルはすぐに真っ白に曇り，処置が効率的に進まないジレンマもありました。しかし，コロナ禍の最前線で働く職員たちのことを思えば，この苦痛など比ではありません。このゴミ袋ガウンは，褥瘡回診だけでなく在宅訪問の際も，しばらくはありがたく使用させてもらいました（図4・図5）。また，職員から提供された雨カッパやシャワーキャップなども驚くほどの数になりました。

表1 病院の概要

病床数	440床
標榜科目	32診療科
平均在院日数（2020年度）	11.4日
大阪府認定・指定	大阪府地域周産期母子医療センター
	大阪府肝炎専門医療機関
	大阪府がん診療拠点病院
	地域医療支援病院
	無料低額診療事業実施施設
救急医療	救急告示病院
第三者評価	（財）日本医療機能評価機構認定
	卒後臨床研修評価機構認定
看護職員数（2021年4月現在）	539名（助産師・看護師・准看護師）

図1 正面玄関の感染対策①
出入口のゾーニング

図2 正面玄関の感染対策②
エントランスホールのゾーニング

図3 正面玄関の感染対策③
限定された入口でのサーモグラフィ